



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	技術報告：「北海道農業の発展と北大農場」展について
Author(s)	若澤, 幸夫; 河合, 孝雄
Citation	北海道大学北方生物圏フィールド科学センター生物生産研究農場技術業務報告, 7, 78-81
Issue Date	2007-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34520
Type	departmental bulletin paper
File Information	7_p78-81.pdf



「北海道農業の発展と北大農場」展について

若澤 幸夫 河合 孝雄

はじめに

2006年9月12日（火）から9月24日（日）まで「北海道農業の発展と北大農場」展を北大博物館1階、知の統合コーナーで行ないました。（右が宣伝ポスター）

明治9年（1876）札幌農学校が開学してから130周年、北大農場に「フォードソンメジャー」が導入されて50年という節目の年になることを記念し、北海道農業の発展と北大農学部・農場のかかわりを歴史的にたどりながら、北大とともに果たしてきた役割を学内外に発信しようとの目的から企画したものです。また、トラクタ関係については別コーナーを設け、企画展示としました。内容は以下の通り。

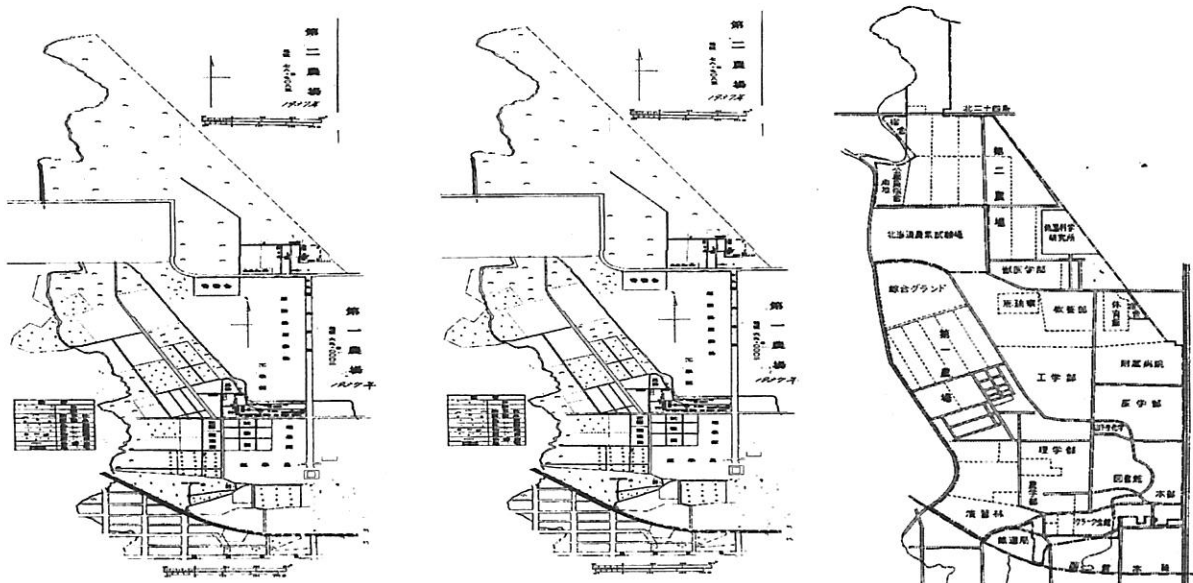


農場の発展史

明治9年（1876）8月14日北海道開拓使所管「札幌学校」開校式の挙行、同年9月8日「札幌農学校」の始まり、クラーク教頭先生の就任と同年9月13日、農場の発足。翌年明治10年（1877）にブルックス教授農場長就任、その後第8農場への発展までをきめ細かにたどり平成13年北方生物圏フィールド科学センターに改組するまでの歴史年表を詳しく示した。

学内農場

第1農場および第2農場用地の変遷として明治40（1907、東北帝国大学移行時）年頃、昭和10（1935、第1・2農場の統合）年頃、昭和40（1965、獣医・低温への用地割愛時）年頃の3枚の平面図を掲示（下図）し、圃場の整備・相次ぐ文教施設への変化が一目で分かるよう展示した。



学外農場

第3～8農場までの所在地図を示し、明治23（1890）年の第3・4農場の受け入れ、明治29（1896）年の第8農場までの取得経過や小作貸し付け条件などの説明の後、小作農場での各農事活

動（講話会、模範圃、品評会、畜産奨励、産業組合、学事奨励）など当時の先進的な取り組みを示し、農場が開墾と生産を通じ農業後継者の育成にいかにか力を注いだかを紹介した。

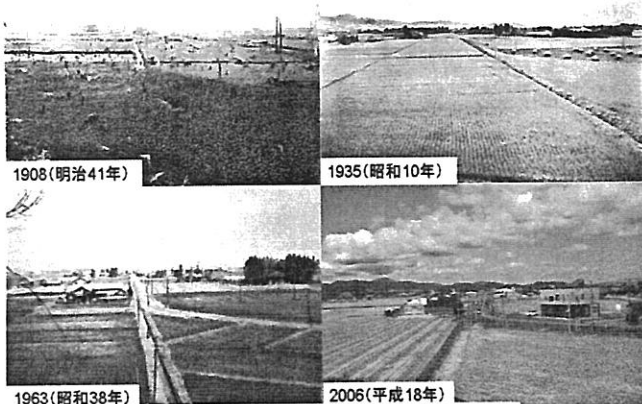
富良野農業の基礎を築いた北大第8農場

また、観光やスキーで広く知られる富良野が、札幌農学校・付属第8農場であることはあまり知られていない。このため特別に特集を組み、最後まで残った要因や肥沃で広大な未開拓地の開墾が、当時の道植民課長からの委嘱であったこと、現地事務所を置いて道路や区割りをを行い開発した経過を示し先人たちの夢をかけた開拓の姿を示した。

また、富良野市街西方にある清水山から撮影した集落「学田一区」、「学田東二区、西二区」、「学田下五区」の明治から現在までを写真で紹介しその移り変わりを示した。



富良野市(第8農場)清水山より北東方東・西二区を望む



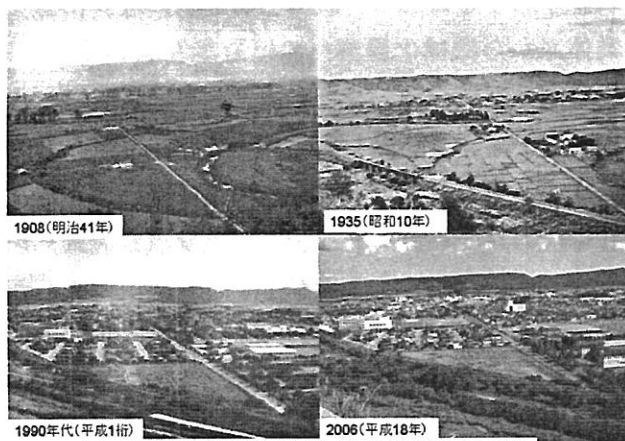
富良野市(旧第8農場)五区西三(旧番外地)より下五区を望む

撮影点の北方150m程に成道記念碑。写真中央は市道五区山部線(旧番線)、数100m先に玉冠神社の地がある



富良野市(第8農場)西七、三番地より北東方中五区を望む

右の写真は富良野開墾地の風景
明治41年撮影



富良野市(旧第8農場)清水山より南東方富良野市街(旧一区)を望む

撮影点：清水山西麓上、写真下手前に富良野川(空知川への合流点直前)、隣接して旧模範圃、その先に富良野市街



富良野市山部(第8農場)西十七線三番地より西北方を望む

手前住宅を避け撮影



技術報告

その他にも、大正元年（1912年）に余市果樹園が果樹産業振興のため設立し、地域に貢献してきた姿、畜産製造部におけるハム・ソーセージの製造技術と北大商品「永遠（とこしえ）の幸」を販売した実績など、多くの写真などを通して示した。

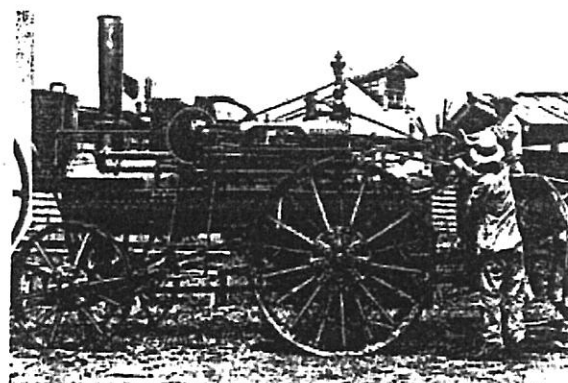
また、農学研究科にもご協力をお願いし、各種遺伝子の染色体上の位置を決定づけた稲の染色体地図、海外の大学に作物種子の分譲依頼した当時の自記筆の手紙など貴重な資料も展示した。

企画展示

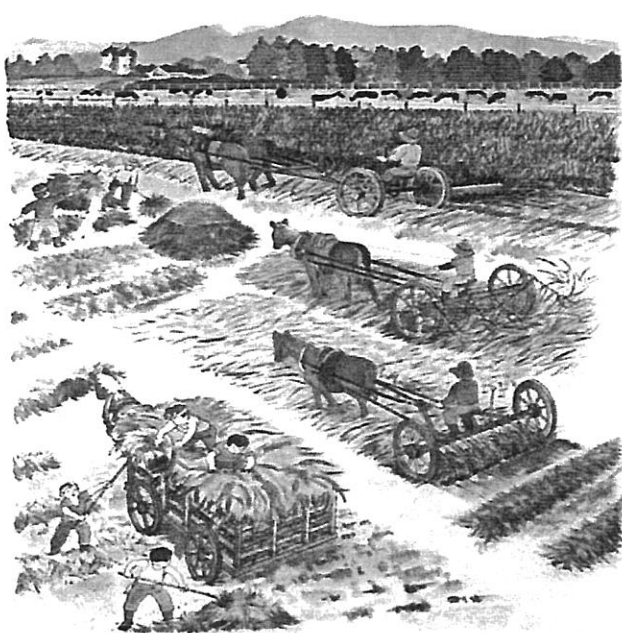
企画展示は、北大農場にとって本格的第1号ゴムホイールトラクタ「フォードソンメジャー」の導入50周年を記念し、農用トラクタの今日に至るまでの歴史を紹介しながら、メジャーが畜力主体の作業体系から機械化農業への道を歩み出した過度期時代と農作業全般の機械化作業を実現させていった発展期の重要な担い手として、北海道農業における機械化体系に大きな貢献を果たしてきたことを貴重な機材や資料で紹介したものである。

まず、乗用型農用トラクタの発展過程として1850年代のスチームエンジントラクタ（定置式）から始まり、盛岡の小岩井農場が1908年に導入した我が国初のトラクタを紹介（右写真）。

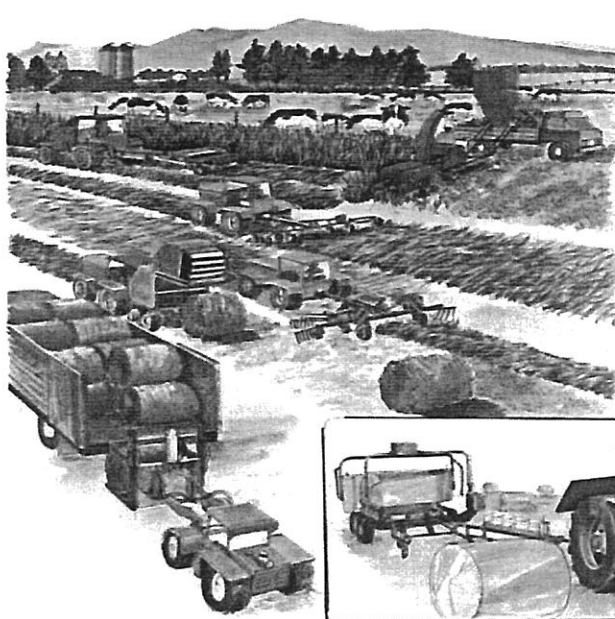
その後1880年代からはガソリンエンジン、鉄車輪・クローラ型への移行、1940年代ゴムタイヤの普及による移動性・作業性が大幅に高まり、1950年から1970年代にかけて多くの農機業界進出と相まって道内においてもトラクタによる機械化農業が強力に推進された姿を示した。1980年代からは、多機能IT化、大型化・高出力化が進み、現在に至っていること資料で表わした。その代表として、フォードが出荷するエンジン出力360psという現在世界最大トラクタの写真とともに牧草収穫作業の画期的な移り変わりを下絵によって説明した。



1908年(明治41年)イギリスから輸入した蒸気トラクター



昭和35年頃の作業風景



平成7年頃の作業風景

また、トラクタの普及台数、馬鈴薯・甜菜の単位労働時間の推移と耕地面積の拡大など導入により、大幅な省力化と経営規模の拡大の様子をグラフで示すとともに、北海道機械化農業の先駆けとなったトラクタの写真〔資料、村井信仁著：北海道における機械化農業50年の歴史、スガノ農機（株）刊、2001、博物館「土の館」（上富良野）提供〕

46台を図鑑として展示した。その他、手作業時代の鋤数本その他、人力除草機、輸入物の発動機、年代物トラクタ・作業機のプラモデル展示、農作業機一覧ポスター、北大農場で現在使用されている機械と農作業の流れを示したポスターなどが周囲を飾った。

今回のイベントとしての「フォードソンメージャー」導入50周年記念コーナーは〔50年以上現役で働き続けるフォードソンメージャー〕と題して、その存在を大きくアピールするよう工夫した。

当時のカタログの拡大復刻版、これまで45年間〔残念ながら昭和31（1956）年から昭和36（1961）年までの稼働記録がないためそれ以後の集計結果となる〕の作業種別稼働時間・同面積・同燃料消費量の総集計（右図）や修理費の総集計など可能な限りのデータを提示した。

また、会場玄関横に特設コーナーを設け期間中可能な限り現車を展示し、現在も現役で働き続ける姿を披露した。折しも農機関係の国際学会とも重なり、教職員他学内を訪れた人たちの注目を浴びた。

謝辞

最後に、この展示会に当たって大学院農学研究院・農学部 生物資源生産学部門 生物生産工学 教授、端 俊一先生、（社）北海道農業機械工業会（元農学部教授、総合博物館研究員）高井宗広先生 には、会場の問い合わせ・手配、貴重な資料の収集・提供、展示などあらゆる面で指導を頂きました。また、研究院・農学部 生物資源生産学専攻 作物生産生物学 教授、岩間和人先生、同応用生命科学専攻 育種工学、高牟禮逸朗先生には大変貴重な標本・資料の提供を頂きました。紙面を借りて御礼申し上げる次第です。

以上

